

## 埼玉古墳群を支える地域

埼玉県の主要古墳は、前方後方墳→円墳→前方後円墳→方墳へと変遷している（次頁）。但し、円墳は、出現以降においては他の墳形を量的に圧倒して存在している。

まず3世紀には、前時期の前方後方形周溝墓と明瞭に区別のできない前方後方墳の時代であるが、他地域を圧倒する規模を有する古墳は見出せない。

4世紀になると、多摩川・鶴見川下流域の南武蔵に4基の大形前方後円墳が出現する。これらは継続して営まれたものであり、そこには権威継承を窺わせる必然性が存在したことが予想される。ところで武蔵国の成立以前には、「ムサ」国があり、それが上下に分国され、「ムサカミ（相模）」と「ムサシモ（武蔵）」になったという説がある。該期の古墳群は「ムサ」国時代の指導者の墓所であろうか。また三浦半島には、同時期の巨大前方後円墳である長柄桜山1・2号墳があり、先述の南武蔵の古墳群との間に相模と武蔵の境界が設定される。その後武蔵の大形前方後円墳は、川口市高稲荷古墳、野本将軍塚古墳と北上を続けたが、その実態（時期・内容）は不明である。

そして5世紀中葉、列島は大転換を迎える。東国もその例外ではない。それは(1)竈の導入、(2)食器組成の転換（銘々器の出現など）、(3)鉄器の普及に代表される。(1)は生活改善をもたらし、(2)は個人の集団からの自立を象徴するものであり、(3)は耕作地の拡大（生産力の向上）を意味する。この新来の様式を逸早く取り入れたのが児玉・大里地域である。当地域では、大集落が継続的に営まれたにも関わらず大形古墳が出現することはなかった。

この県北地域の生産力の向上を背景に5世紀後半、未開の新天地に稲荷山古墳が出現した。その後4・5代、百数十年間に亘り他地域を圧倒した大形前方後円墳を築造し続け、埼玉古墳群が展開した。同古墳群は、武蔵国造の墓所として捉えられているが、これは「武蔵国」と「国造制」が成立しているというのが前提である。埼玉古墳群の安定した首長の継承から類推すると、これらの前提は容認されて良いように思われる。

つまり埼玉古墳群は、児玉・大里地域に5世紀後半に展開した集団の経済力を背景にして出現・展開したものである。そして武埼玉古墳主は蔵国造として、その全域を支配していたのである。

（中村倉司）



